

素人の集落組織再編論

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者名	南,侃
発行元	日本農村生活研究会
巻/号	35号
掲載ページ	p. 27-31
発行年月	1974年7月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



れはどのような方法で算出したものか。

報告者・これは今日の報告のなかでの1つの参考ということで採用したもので、算出方法については吟味していない。

〔第2報告〕

素人の集落 組織再編論

農業技術研究所 南 ただし

研究会のシンポジウムの提供話題として、こうした表題を掲げたことに、いささか不謹慎のきらいがあるかと思うが、これまで20数年間農業経営研究に従事してきて、これからこのような問題に取り組んでゆこうとしている決意の表明ということで御了承を得たい。

すなわち、近年、これまでの生産優先に対して生活優先ということが強調されるようになったが、そのなかで、公害、環境問題や「むら」の崩壊といった問題について、これから勉強しようとしている。その際、正直いって、昭和20年代から30年代を経過する間に、これらの問題について私自身どれほどの予見ももち得たかが、まず反省させられる。研究機関に所属するものとしては、こうした事態の変転を予見し、そこにいろいろの課題を掲げて研究を進めると同時にいろいろ提言すべきであったろうが、私自身生産優先主義のムードにすっかり巻きこまれていたことを告白せざるを得ない。

しかし、私なりに生活を大事にしなければいけないと考えて、とりこし苦勞はしてきたつもりであるが、実のところは割合のんきに過ごしたのではないかと思う。それほど深刻に考えて研究をしたり、提言をしたりしないのが、私も含めて何か日本人の通性のようにもみえるのであって、集落の組織が我国農業、農村においてきわめて重要な存在であることを誰もが知りながら、それが破壊されてくることを深刻に受けとめることをしなかったのではなからうか。

このように考えて、集落再編あるいは社会開発について論じた著書を読み、また現実の場面で指導乃至事業の推進を担当されている方から話をうかがえばうかがうほど、私自身がこうした問題について、まったく

素人だったということを思い知らされ、大いにあせっているところである。今日の報告でも、十分整理できていないのが実態であるが、この機会に自分なりの考えをさらけ出して、誤りや未熟の点を指摘いただくことによって、少くとも昨日までよりは1歩か2歩前進できるものはないかと考え、あえて報告することとした。

以上のようなことで、標記の課題を掲げたことを、まず御了承いただきたい。

さて、集落組織という用語を用いて何か論議をしようとする場合、その内容について考え方の差異がみられる。そこで、この用語の意味する内容、概念がどういふものかを、まず明らかにしておく必要がある。私なりの理解を述べれば、集落組織とは、無欲で生活力の乏しい人達が生活を維持全うするために必要な、1つの条件であると考ええる。

たとえば、生産組織の場合は、「むら」のなかにやり手がいて、その人達を中心にして組織化されることが多い。生産の面からすれば、経営能力が高く生活力も強い人が周りの人を引っばってゆく形が望ましいといえようが、集落組織になるとそれだけで問題は解決できない。

そのこととの関連で生産組織のことにもう少しふれると、生産組織を一方でたててゆきながら「むら」全体としての生活の条件をつかってゆこうとする場合に、これまでにみるところでは、その過程についてこれない層の取扱いが粗末に過ぎると思われる。例えばこの「むら」では酪農中心でやりましょう、養豚を大きくやりましょうということで計画をたて実施に移してゆく場合、その他の部門をどうするかについての配慮に乏しいのが普通である。中心におかれた作目は組織化もうまく進み、生産もどんどん伸びてゆくが、そこでは副次的な部門がどうしても多少足手まといになってくることは避けられない。その引受け手がほしい訳だが、引受ける組織を編成することが困難な場合が多い。

これまでの多くの事例でみると、ハウスとか畜産とかのいわゆる成長部門を担当する組織に対して、稲作を担当する組織が常に従属的な地位におかれることになっている。ここでも中核農家をたてながら組織化を進めることになるが、その展開は不十分なままに終るようである。この場合、成長部門を担当する人達と、

それをしない人達—したくともできないか、やる気がないかいろいろあろうが—との違いが、「むら」のなかでの社会的な地位の違いと対応している。先頭に立つ層に対して後からついてゆくような層も、「むら」のなかで生きてゆかなければならないので、一応はついてゆこうというポーズはとるが、あまり本物でないという事態がみられる。

生産組織の問題に対する以上のような理解にたつ時、集落組織については次の点が重要と思われる。成長部門に光をあてた農業生産のシステム乃至構造からみて、たとえ稲作が副次的な位置を占めていたとしても、それがなければ主部門も成立しない関係のものである。そこで、基幹作目を、その地区の経済を展開させてゆく基軸作目と、その展開をさせる基盤になるところの基盤作目ということにとらえ、そうした意味での基盤を担当するものとして組織化を進めるべきだと考える。

集落社会とは、そこに住んでいるいろいろな人達すべてが、自分達がやはり意義ある存在であるということ素直に感知し、安んじていられる場所であることが望まれているものであり、集落組織はその望みを体現すべきものでなければならないといえよう。

次に、集落には、それを管理運営、マネージする人、階層があり、時代とともにその内容に変化がみられる。そうしたいわばリーダーシップの問題をめぐって、次のような点に着目したい。

それは、時代的ないかなる身分をも超えて「むら」のなか形成される—表現が大変苦しいが—一家父長的な願いがあるということである。つまり、うまくやってゆける人はいいけれども、うまくやれない人も多いという場合、それを何とか包みこんで生活させてゆこうという願い乃至祈りが存在したと理解できる。そうした祈りが存在するところに、集落組織の崩壊が嘆きとして感じられるのであって、それがなくなったところでは、コミュニティ・デベロップメントとかコミュニティ・オーガニゼーションもあり得ないのではないと思われる。

これまでのところ感覚的なもので、論理的な裏付けに乏しいが、「むら」に入っていた場合、現実にそうしたものの存在が認められることは間違いない。これは私だけでなく、誰も認めざるを得ないのではないだろうか。そうだからこそ、政治の関係者も、行政

担当者も、集落組織の崩壊をどうするかの問題を真剣にとり上げることになる。さらに、農村の人達と限らず、都会人も我身の問題にひきかえて心を痛める問題たり得るのではなからうか。

あまり学問的ではなく感覚的にすぎるとの批判はあるが、私は、以上のようなものとして集落組織を考えている。従って、多様な形態を示す集落の性格を歴史的にどう規定するかといった問題について、大いに批判と助言を仰ぎたいと思う。

そこで次に、集落組織の再編という問題について、素人なりに、私ならばどこに目をつけるかといったことについて述べてみたい。まず、私は、「むら」に入ったならば、上述のような意味での祈りの主を探そうと思う。その“主”が、町長さんとか村長さんである場合もあるが、ごくありふれた農家のなかにも探し出せる。もち論すぐにはみつからないこともあろうが、余程の例外を除いて、必ずどこかに居るはずである。

このようにして、集落組織の再編を進めてゆく上での担い手、あるいは頼みにする人が祈りの主といえるが、それを1人で具現している人物を見出すことはなかなか難かしい。そこで私は、祈りの主を抽象的に考え、そうした精神が分散して、数人乃至10数人のなかにこま切れ的にでも存在していないかどうかをみようとする。つまり、これらのこま切れを合成して、1つの再編の軸にすえることができると考えている。

さらにふえんすれば、祈りの主というのは、みんなが食べていけるように考えてくれるだろうし、そのためにみんなを適材適所に働かせるシステムを考えてくれるだろうということである。これが行政によって主導される場合、どうしても“おしきせ”のシステムになり勝ちで、ここでは適材適所を考えるよりも、必要なものだけについてそれを組織化するというきらいがみられた。しかし、集落再編の軸になる“主”のもっている理念は、決してそういうものではないと考えられる。

次に第2の着眼として、内部葛藤の予見と整序に關してである。これは難かしいことを述べている訳でなく、崩壊過程に足をつっこんでいる集落を何とか再編しようということで、その方策なり方法について「むら」人達に相談をかけた場合、どういう立場の人からの発議であっても、たちまち「むら」のなかでいろい

ろな葛藤が生ずる。この葛藤は避けて通ることのできないものだが、これを徹底して起るだけ起こさせ、その上でいろいろな対立、矛盾、不満といったものを整序し、あるいは整序しながら計画をたててゆくという手順をとることが、実際には少いようである。

生産計画についてのこれまでの進め方をみても、一定の手順に従ってつくり上げた計画を、事業として具体的に進める段になると、計画からだんだんずれてくる場合が多い。そこに、何かの手抜きがあったのではなかろうかということが推察される。生活を尊重し、優先させてゆこうとする場合に、今までのやり方と具体的にどう違えればいいのかを考えると、要するに、今述べたような手抜きをしないという点に求められるのではなかろうか。集落組織の再編を、農村地域計画のなかでことさら問題にするのも、これまでではどちらかといえば避けて通った問題を、正面にたてて考えてゆこうとするところが大きく違うからだといえよう。

現状でも、環境整備事業その他各種の施策による事業が進められているが、その場合をみても、立派な計画に対して、農家の側がどうもそれに乗っからないといった事態がしばしば生じる。もち論一部にはその計画で進むことに積極的に対応するものもいるが、とてもついてゆく気になれないというものが大部分を占める。それは決して理屈なしで反対したり、あるいは無関心さを示すのではなく、先述したような農家間、階層間、年令間などのいろいろな葛藤が整理されていないため、はっきりした態度を示せないのだとみることができる。

計画から事業の実施へと進む過程で、こういう計画でゆきたいと思うがどうかということで住民の意向を問う段階があるが、それへの回答でも、現実とはずいぶん分かれ離れてくる場合が多いように思われる。つまり、まともに回答できない状況で意向をとり、これを基礎にしながら計画を具体化してゆこうとするやり方に対する反省の上にたつことが、集落組織の再編問題に接近する際の重要な着眼といえる。

以上要するに、農村地域計画をたてる場合、まず食べてゆける道として何があるかということで生産計画がたてられる。それはあくまでも、その計画に「むら」の全員がのっかってゆくことを前提にしているが、現実の「むら」には、経済的にみて最高の生き方を望ま

ないものがかかり多く、具体的な行動としてついてこないものも沢山いることに、十分な注意を向けるべきだということである。もしそれを予定するならば、計画のなかに、当然そうした農家群・層の存在を前提にした生産組織の育成方策が組込まなければならないことになる。これが行政的に考えても、計画樹立から事業実施へと進めてゆく上での、欠かすべからざる1つの手順と思われる。

第3の着眼として、経営機能の偏在ということについて考える必要があると思う。このことと関連して、私は、農業とは儲かるものではないと考えている。儲かる仕事というのは新しいものであって、古い昔からあった仕事ほど、並に食べてゆけるだけのことはできるが派手に儲かるというものではない。

こういい切ってしまうと、農業は古くからのものだが新しいやり方の農業もあるではないかとの反論も出ようが、何としても零細な生産単位でもってこの市場に立ち向う場合、1年、2年当った時はかなり儲かることがあったとしても、長い目でみればやはり儲かるものではない。

そうした厳しい条件の下で、自分も食い、同時に周りのものも食えるようにしてゆくには、余程強力な経営機能が要求される。例えば寒高冷地で耕地も乏しいといったところで食べてゆこうとするには、大変な経営機能乃至経営能力を必要とするとはいうまでもない。ところが、そうした強力な経営機能が、私のみる「むら」のなかの祈りの主に必ずしもくっついていないのが一般のようである。経営能力からみて、強力な農業者の多くは、社会的行動の上で脱地域社会の方向で進んできている。

そこで集落組織の再編を具体的に進めようとする場合、祈りの主だけでは成立ち得ず、どうしても経営機能をオルグしなければならない。ところが、そうした能力をもった人ほどこれらの問題にそっぽを向き、なかなか呼びかけに応じないことが、現実的な悩みの1つになっている。脱地域社会型に対して地域指導型というタイプをおけるが、脱地域社会型の農業者がぼつぼつ存在して秀れた経営成績をあげているのが実状である。その人達に逢つていろいろ話してみると、とにかく俺はそうした問題はごめんだというようにいっているが、本当にそうかというとならざるも限らない。内

心では地域指導に熱意をもっているものが多い。事実、これらの農業者を経過的にみると、はじめは非常に脱地域型だった人が、しだいに経営が伸びてきてある安定期に入るとつれて地域指導型に変ってくるのが一般であって、地域指導型、脱地域社会型といっても、その人に固定したものでないことが明らかである。

このようにして、脱地域社会型の農業者達が内包している地域指導志向を引き出して、これを集落再編に生かしてゆく方策を考えることが重要といえる。そのことによって、経営機能が「むら」のなかで偏在していることを克服すると同時に、脱地域社会型農業者の社会的な散在、孤立状態を克服してゆくことが、集落再編を進める上で有効と思われる。ただしその場合に、いわゆる“おしきせ”の生産組織の1構成員として、そうした農業者をほうり込むことは避けるべきであろう。それとは別の、その人のもっている経営機能を集落組織そのものに注入できるようなサブシステムをつくることによって、その機能を活用するという配慮こそが必要といえる。

最後に第4の着眼に移りたい。集落が農村生活の単位だということは一般的に理解できるが、これらのすべてが、先に中山氏が報告された集落内完結型とは限らないことである。最近では、平場であっても完結型足り得なくなってきたのが実状であろう。そこで、そうした集落間の連合といったものが考えられないかどうか、である。

例えば佐賀県の集団栽培の動きをみていると、集落のなかだけでは片付かない問題がいろいろ出てきた場合の対応は、集落間で相互に話合って協力関係をつくることを通じて問題解決をはかっている場合が多い。

どうしてかは明らかにできないが、我々の考え方のなかには、できるだけその場で完結する、あるいは完結した方がよいという観念が強く巢喰っているように見える。そのために行きづまる場合も多いのであるが、いわゆる農村社会の閉鎖性に、我々の頭もかなり影響されていると思われる。それを開いてゆく考え方が、現状での集落再編を進める上で重要ではなからうか。

さらに、集落組織は、つくろうと思ってもつくれるものではないという点である。それをやたらつくりたがる人もあるようだが、無理なのではなからうか。現場に近づけば近づくほど、そういえばいえるだけのこ

とで、あまり建設的な意見でないとの批判はあるとしても、これはやはり必要な着眼と考える。

以上、私自身今のところいうなれば“たけのこ”であって、これから伸びたとしても“やぶ”で終る可能性が多い。しかし、集落組織の再編といった問題への取組みに当っては、長い期間をかけてエネルギーを蓄積しながら継続的に研究を進め、その過程で問題整理を体系的に行なうことの必要を強調して、私の報告を終りたい。

(第2報告に対する質疑応答)

角山(新潟・刈羽農改)・すべての住民が、経営経済的に最高の生き方をしようとしなない点は、農村に住んでいてよくわかるが、その人達を、生産組織のシステムのなかに適確に位置づけるということについて、具体的に説明してほしい。

報告者・これは施設園芸であろうと畜産であろうと何でもかまわないが、皆なで組織をつくって取組もうではないかと呼びかけても応じないというか、積極的に反対はしないけれども俺はやりたいという形が出てこない人達がかかりいる。その場合、いろいろな意味があつて出てこないのではないかということ述べたのである。

例えば、自分としては将来状況さえ出てきたらやろうという腹はあるのだが、今のところは手を出さない方がいいと判断して、時をうかがっているのがある。これは所有面積、あるいは所有している労働手段の体系、経営能力、ことに資金能力、さらには家族構成などからみて、それ程条件の揃っていない人の方がむしろとびついているのに、条件が揃っていないがらとびつかないことはおかしい筈である。

その他、外観上、経済的には最高といえないありふれた生き方をしている人もいるし、うちは後継者もないし、あと10年もすれば経営としての寿命を失うことがはっきりしているものもある。自分一代での経営の寿命さえ全うできればよいとするものなかでも、人によって全うの仕方や程度に違いがある。

こうしたそれぞれについて、適材適所に配置できうるシステムを考えようというものである。具体的には、さらに吟味する必要のあることはいうまでもない。

橋本(東北農試)・家父長的願い、祈りという表現

について、家父長的ということのニュアンスをもう少し説明してほしい。つまり文脈からすれば、あえて家父長的と入れなくとも理解できるように思えるが、これを入れた論理はどのようなものか。

報告者・集落を再編する原理とはどういうものかについては論議の分れるところであるが、私には、理屈で説明し切れない何かそういうもののように思える。宗教まで行くと困るのだが、しかし、この問題をつきつめて行くと宗教の問題にまでつき当たると考えている。そこまではまだ勉強していない。

ここで家父長的というのは、権力を掌握していきわめて横暴であるといったものではなく、無私でありかつ公平であることの理想像を、祈りの主といったことで表現したかったのである。

〔第3報告〕

村を歩いて

島根大学 安達生恒

はじめに

きょうのシンポジウムの課題が、集落問題になっておりますので、そのことと考え合わせて日頃感じていることを申し上げたい。

中山さんと南さんのお2人のお話しを、私も非常に興味深く聞いたんですが、ふれておられない非常に重要な問題があるのではないかと思いますので、その点から申し上げたいと思うわけです。

最近では、農林省ばかりでなく自治省などでもそうですけれども、集落問題をわりと軽くみる風潮があるように思います。そのことが、農村を非常におかしくしているし、農業自体をもおかしくしていると、私は思うのです。戦前の話ですが、時の石黒忠篤農林大臣は農林省のエリート官僚を採用したときに、まず現地研修に出したらしいのです。出すときに課題を与えて、その村にかなり長い間泊り込んで勉強し、レポートを出させたものらしい。そのときに言ったことは「お前はあの村に行って、一番奥の集落に住んでいる人が、なんとか生活していけるために、その村の農業や農村をどうしたらよいか、それを考えてこい」という宿

題を出されたと聞いているんです。これはたいへんおもしろい話で、一番奥というのは、一番不便なところだし、おそらく一番生産力の低いところでしょう。そういうところの農民達が、なんとか生産と生活の再生産をやれるという見地から、その村の農業をどうしたらいいか考えようということなんです。その考えの原点は、一番奥の農家を倒さないということにあったのではないかと思うんです。

ところが、最近ではそれと全く反対なのであって、奥の方は牛は住めても人間の住めるところではないから補助金をやるからみんな平場へ出てこいといっているわけです。自治省が集落再編成といっていますけれども、今まで行なわれてきましたのは、再編成というよりも移転です。一番奥はもうだめだから出てきなさいというわけです。とくに過疎地なんていうのは、それが40戸あったのが10戸になったというような“残党”がいるわけですから、それを移すことを集落移転と呼んで、実はこれが集落再編成なのだということで、行なわれてきているわけです。

それから、例の生活圈構想、広域行政圏の政策もみなそうで、つまり、村の一番中心地にすべての建物を集中する。道をつくってやるからそこを通ってくればいいのだ。それでも不便なところは、もう人の住むところではないから中心地に出てこい、と、一口にいえばそういうことなんです。

そのことが、農村社会を非常におかしくしているし、自然環境の保全、防災、の点からみても良いやり方ではないと思っているわけなんです。だから、石黒忠篤の方が偉かった、今のやり方はどうもおかしいという、少々保守的な私見をもっているんです。とにかく、集落というものをもっと大事にしなければいけない、ということですよ。

また、農業サイドでも、農業を発展させるためには機能的集団の方が生産力につながるのだから、地域集団などはあまり考えない方がいいのだ、というような考え方が強かったように思います。機能集団というのは、広域的になってきますから、1つの町村だけでなく、1つの郡、たとえば花のようなものでは県単位ぐらいに広がって、それを集めて集団組織をつくってしまう。こんなふうになりますと、地域問題はほとんど消えてしまうんです。そうならざるをえない必然性